

筑前国須恵の眼科医 9代田原養伯貞一

上園 慶子

西南学院大学大学院国際文化研究科

天保年間に日本4大眼科の一つとして知られた筑前国須恵の田原眼科、特に9代養伯貞一について報告する。

1. 須恵町における眼目療治の始まり

『高山司慶流眼科書』（研医会図書館蔵）の巻頭に「九州筑前国末邑 高田七兵衛伝授書 真田了二、高場順清、田原養伯」と記されており、医師が筑前国末邑（現在の福岡県粕屋郡須恵町上須恵）の高田七兵衛から真田→高場→田原の順に相伝されたと考えられる。前2者については他に資料がなく未確認だが、高場順清は粕屋郡須恵町須恵に墓碑が残る。順清は唐津城主寺沢広高の家臣であったが、島原天草一揆で主君が改易になった後、粕屋郡内橋に居ついて眼科医になった。

2. 田原家

田原家は豊後大友氏の有力な家臣であったが、大友氏の勢力衰退の際（明暦年間1655-58）に筑前国須恵村に移り住んだとされる。家祖の弥吉貞俊が高場順清から眼病治療の技術を学び、その子の弥吉貞勝が上須恵村で開業した。代々、養朴・養伯・養全と3つの名を一族内で繰り返し襲名し、常に数名の眼科医が診療・治療を行った。

3. 治療の実際

1) 正明膏『高山司慶流眼科書』は秘伝の正明膏について、寒水石など10種の原料を練り上げる製薬法を示し「突目、ウズキ目、疵目、鳥目、メモライ、五臓六腑の疼目72種、其外6種共ニコノ正明膏ニテ治セズト云ウ事ナシ」と当流きっての妙薬なることを強調している。練り薬はハマグリの貝殻の中に、紅絹（もみ）に包んで入れて売られた。

2) 眼科手術 田原の各代は手術とくに白内障手術を得意とした。手術の方法は「針立て法」で角膜あるいは強膜から針を刺入して、混濁した水晶体を硝子体中に落とす法である。

3) 「眼目療治帳」と名付けられた診療記録が、文政2年（1819）から嘉永2年（1849）までの30年間で9冊現存する。初診月日・処方内容・診療終了月日・患者名・出身地などが書かれている。1年間の記録が完備している6年間の年間初診者数（全て筑前以外）は約1000人で、日本各地から受診している。筑前国内の記事は完備していないため初診者総数は不明である。

4) 「眼療宿場」 眼科の治療は長期に亘るため、田原眼科の周辺は患者のために宿屋を兼業する農家が集中していた。「眼目療治帳」には42の屋号が確認され、38件は場所も特定されている。

4. 藩医の活動

田原家は4代から12代まで福岡藩の藩医を務めた。『公務手鑑并私用出方 二』（福岡市総合図書館蔵）は9代田原養伯が、天保6年（1835）元旦から天保10年（1839）4月13日までの勤務状況（出方・奉伺・廻務）、藩主などの健康状態、訪問先、頂戴物、書状の文面、行事などを記したものである。

天保6年（1835）1月1日から同6月23日までは福岡勤務で、出勤日は1日・15日、祝儀日、節句など、通勤手段は馬、藩主（11代長博公）が下国した4月18日から6月23日までの間は藩主の御供で度々出かけており拝領物も多い。

5. 江戸での評価

小川劍三郎『稿本 日本眼科学史 全』には、「ソノ第九世尤モ名アリ。天保年度、馬島、諏訪、土生ト共ニ日本四大眼科ノ称アリ。尤も手術ニ長スト称セラル。」同『稿本 日本眼科年表』には、「嘉永二年（1849）5月23日 田原養伯没（44歳）江戸ニ在ルコト十八年」と記されている。

9代田原養伯貞一（33歳）は、医師として十分な技量があった事は勿論、藩主（25歳）と年齢的に近かった、藩主は江戸生まれ、江戸育ちで、身近に話せる人が少なかった、医師は士農工商の身分制度外で縛りが緩やかだった、乗馬が得意だった、性格が陽性で人好きがしたことから、藩主に医師・家来・友人として、まず福岡で親しく用いられ、その後江戸でも活躍して田原眼科の名を高めたと考えられる。